

〈資料〉

下里泰徳編「宮古マラリア追憶記」(その三)

崎 浜 靖 (沖縄国際大学)

鈴 木 厚 志 (立正大学)

この資料は、1920年代後半から1960年代にかけて、沖縄県宮古島に存在した熱帯熱マラリア有病地における防遏対策の内容と、それらの活動の記録である。記録は、宮古マラリア防遏所(現在の宮古保健所)に勤務した伊是名信貴氏(故人)と下里泰徳氏(故人)らにより、執筆と編集がなされた。筆者らは、下里泰徳氏の友人であった小禄恵良氏をとおり、この資料を預かり、本誌資料として3編に分けて掲載を行っている。その三では、アジア太平洋戦争末期から敗戦後にかけてのマラリア罹患者急増への対応と、宮古民政府・群島政府期からウィラープラン実施期におけるマラリア防遏達成までの苦難と喜びを、生活者と防遏作業による記録をもとに掲載する。

1. 解題(その三)

1) ウィラープラン下の宮古島におけるマラリア防遏

「宮古マラリア追憶記」(その一)では、アジア太平洋戦争以前のマラリア対応の過程を紹介した。とくに昭和2(1927)年8月の宮古マラリア防遏所の設立によって、宮古島における防遏作業が本格化した。その具体的な作業内容をみると、蚊帳や蚊取線香の使用の奨励、松葉等の燻煙の励行等に加え、環境的対応としては、水溜り、沼、下水路などの浚渫などが実施された。その他には、住民向けの予防宣伝と塩酸キニーネの服用などの薬剤的予防を重視し、一定の効果をあげたことが報告されている。

その一を受けて、前稿(その二)では、アジア太平洋戦争前から戦争後にかけての統計資料の分析から、マラリア有病地の詳細な感染者データを報告した。とくに原虫種別患者数・死亡者数や脾腫指数のデータをはじめ、マラリア防遏作業成績表、有病地区水系調査表などは、戦前・戦後期からウィラープラン実施までの道筋が理解できる内容を含んでいることに加えて、具体的な作業内容のデータが提示されている。さらに、沖縄におけるマラリア研究のなかで、これまで考慮されてこなかったマラリア防遏所内の組織(防遏囑託・作業連絡係・服薬係・作業要員)の動きや、それらの地域的配置を検討する上でも、貴重な資料が提供されている。

前稿(その二)を受け、本稿(その三)では、防遏作業への取り組み状況と統計資料に記された指標の推移を背景に、生活者と作業員らによる記録(新聞記事を含む)から、宮古島におけるマラリア防遏の実態にアプローチする。

生活者は、アジア太平洋戦争末期、米軍戦闘機による機銃掃射下での部落内の生活や亡くなった者への対応、さらに帝国海軍飛行場建設のために、劣悪な環境の下への転居を余

儀なくされ、次々とマラリア罹患者が発生し、再び転居していく辛苦を記載した新聞記事を報告する。マラリア防遏作業者は、戦後の罹患者急増期に自らも罹患し、防遏作業者として蚊の幼虫調査、DDTの散布、排水溝の清掃等に奔走し防遏を達成していくようすを報告している。これらより、当時の宮古島住民の辛苦と喜びを確認することができる。

2) 本資料の提示する内容の特徴

本資料（その三）を掲載するにあたり、その一の98頁（崎浜・鈴木2021）に記載した構成案の配列を変更した。その理由として、その二と共通し、人びとの語る宮古マラリアとの闘いの記載を、時間系列順に配列したためである。また、その一とその二では、下里泰徳氏の読みをYasunoriと表記したが、Taitokuが正しい表記である。これまでの表記を改めたい。以下、本資料（その三）において提示する内容の特徴を記す。

筆者らは、その二の1. 解題の2)において掲載した表1の昭和19（1944）年から、昭和21（1946）年にかけての死亡者数は不詳となっており、その背景を述べた。今回掲載する、その三の3. の1)の①と②では、当時の居住環境や食糧事情、米軍と対峙するなかでの部落内におけるマラリア罹患者への対応の様子が語られている。また、3. の1)の③を記した久貝氏は、海軍飛行場建設のため、現在の宮古空港近くの袖山部落近くに移り住んだ住民の、戦後直後の惨状と救済の様子を、宮古タイムズ紙からの引用により報告している。いずれも、当事者による貴重な記録である。

アジア太平洋戦争終結から1年ほどして、宮古民政府は、原虫対策、蚊族対策、刺創予防からなる「マラリア撲滅三原則」を発表する。米軍側はDDT粉剤と散布器、さらにアデブリン錠を用意し、より積極的な新たな撲滅対策を講ずるようになる（家田1995）。こうした状況の下、本資料の編者である下里泰徳氏は、宮古マラリア防遏所マラリア防遏課長であった伊是名信貴氏の説得により、昭和24（1949）年4月30日付で同所に勤務することとなる。防遏技手としての下里氏の業務は、3. の2)の④より、「水系及びアノフェレス幼虫の発生調査、水田水溜まり等に対する薬剤散布、排水溝の清掃、浚渫作業等督励、患者に対するアデブリン服用の指導、及び衛生教育、タップミノーの移植、採血、鏡検」（一部変更）に及んでいる。しかし、実際には「人通りのまばらな山々の小道をかき分け、或いは水深1mを越す流れの中を25ポンド入りのDDT粉剤を担いで渡り、パンツ1枚で水深1m以上の排水溝や沼に下りて清掃作業を実施し、水田のあぜ道を踏んでの薬剤散布の際、誤って水田にころがり込んで泥まみれになるなど幾度かあった。」（一部変更）と記載しているように、まさに体当たりの作業を伝えている。

防遏所書記の豊原秀夫氏は、3. の2)の③において、現場における作業を、より客観的にとらえ、宮古島におけるマラリア防遏達成の要因を4点に要約している。第一は、防遏責任者と作業者の人事が最適任者で構成され、業務を誠実に実行し、人事異動がなかったこと。第二は、薬剤及び器具を常時点検したこと。第三は、宮古島と八重山の防遏作業は、同時期に同型で一斉に実施したこと。第四は、アメリカ政府からの潤沢な費用援助が

あったことを指摘している。

1957年からはじまるウイラープランにより、5年後の1962年に宮古島のマラリア防遏は達成される。下里泰徳氏は3.の2)の④において、「マラリア有病地区の中で古くからマラリアに苦しめられてきた平良市字東仲宗根添の山北部落(現在の宮原部落)では、将来へ向けての部落発展の想像画を掲げて部落民総出で健康祭を盛大に挙行し、健康に甦った喜びを心いくまで踊り歌い祝った。」と、自らの出身部落住民の喜ぶようすを記している。

次章以降の*は、筆者らが補筆した箇所を表す。

2. 資料(その二の続き)

3. 人びとの語る宮古マラリアとの闘い*

1) 生活者による記録

① 沖縄戦当時の宮古島のマラリア

旧新聞記者 瀬名波栄

由来、宮古のマラリア有病地帯は、大野山林一帯から、東仲宗根添の佐川根、増原、更に裏城辺、下地町崎田川周辺と全域に広がっており、佐川根や山川部落など幾つかの廃墟部落があった。この一帯は平常からマラリア危険地帯とされ、生水の飲用など禁ぜられていたのであるが、3万に上る部隊が宮古島に進駐するに及んで、湿気に満ちた防空壕や洞窟陣地、アダン林の中の避難兵舎など、非衛生的な住居環境下、防蚊対策もなく、一般住民も洞窟や急造の小屋に住むようになって、マラリアは急速に蔓延していった。しかも制空制海権を米敵機によって封鎖されて、補給の途絶えた孤立化の中、連日の空襲で甘藷の自給態勢も計画どおり進まず、食糧事情は日に日に悪化、それに飛行場づくり、陣地構築作業、教育訓練と労働過重や居住条件の不備がたたって、マラリア病蔓延に拍車をかけていった。日本軍は鳥やトカゲ、カエル等を捕えて食し、野菜を食いつくし、栄養失調で骨と皮ばかりになっていく。こうしたマラリア病の蔓延を重視した第28師団衛生部では台北帝大の熱帯医学研究所から宮原、大森両教授を招いて、軍医のマラリア病に対する教育実施を始め、全島に亘って、雑木、藪の伐採などの予防措置や原虫保有者の早期発見、予防薬内服の徹底等、その対策には苦心したが、医療品の不足、殊にマラリア防遏に必要なアデブリン、硫規(錠)、塩酸キニーネ、殺虫剤等の準備不十分で、その効果はあがらなかった。

食糧不足で兵隊も民間の畑を借りてサツマ芋を植えたりしていました。それで足りなかったから、蛇も食べ蛙も食べていました。あとは民家を荒らす。しかし、もしも民間の者が軍のものを取ろうものなら大変です。一度などは15歳位の男の子が芋づるを盗んだといっって、炎天下に電信柱にしばりつけられた事があります。福里はもともとマラリアのないことで知られていたのに戦争中はマラリアが多かった。僕の家族も5人かかりました。栄養が悪かったから罹り易かったのであろうけれども、アメリカがマラリア菌をまいたと思

いました。薬品不足の状態では助かるはずのないマラリア患者も救えなかった。戦争中、多良間から西表島に木炭焼きにたくさんの人が強制的に徴用され、向こうの悪性マラリアで死んだ者もいるし、帰ってから発病する者もいた。ところがマラリアに効くバグノン（キニーネを主薬とした注射液）はほんの僅かしかない。みんなにやれば中途半端で誰も助かる見込みはない、医師達は困りました。

②第二次世界大戦当時のマラリアの思い出

下地ヨシ子

昭和20年の或る日、米軍の偵察機は宮古島の空高く島の状況を偵察していた。その頃、島尻部落の北の海では、やがて空襲や艦砲射撃が近づいているという状況も知らず、付近の大神島や池間島の漁夫達が、サバニ（刳り舟）にドラム缶に詰めた燃料を積んで、のどかな大洋で行きつ戻りつ漁をしていた。米軍の偵察機はそのドラム缶を見て、確かに「此の付近は日本軍の戦いに利用する必需品のある倉庫地域であるに違いない」と判断したのでしょう。その年の太陽がかんかん照りつける初夏の或日、島尻部落一帯は米軍の空襲の機銃掃射で多くの損害を被ったのである。記憶は定かではないが、100戸前後の戸数だったのが20戸程度になるまで焼けつくされてしまった。住民の殆どは、すすきをかりて来て、ありあわせの材料（アダンの木など）で鳥小屋みたいな掘立小屋をつくり、不自由の住家で生活を始めた。着物、食物は殆どなく、海の塩水を汲んで来て、野菜などの味付けをして食す生活だった。部落全体、不潔な環境下の生活、家蠅はたかり、ウジがわき、部落南部に広がる水田地帯では各種のポーフラが多く発生して、蚊は夜毎、部落民の安眠を妨げていた。そのような状況下に於て、マラリアは部落民のほとんどをおそったのである。防蚊用の蚊帳はなく、ただ蚊の餌食になるばかりだった。空襲は2回に亘っておこなわれたが、野田山林で築造された防空壕まで行くには弱りきった体では老若男女、息のつまるような人びとが殆どだった。部落民は全員と言っていい位マラリアに罹っていた。当時毎日5人以上の死者が出たが、マラリア熱から醒めた元気が2～3名で、患者が敷いて寝ていた、よごれた筵で死体を包み、死者を葬るのが日常だった。

親、兄弟、姉妹が息絶えていても、側で発熱して臥している家族達はただ茫然と眺めることに過ぎず、死体を葬る元気は彼等にはなかった。顔色は青ざめ、頭髪は脱毛し、脾臓ははれている者が殆どだった。死者を墓場まで運ぶ元気はなく、筵でからんで道路近くのアダン林の中に葬ったのが多数だったようである。昭和20年から翌21年にかけて部落での死者は100人以上にのぼったと伝えられている。

私は16歳の少女だったが、マラリアのために体力は弱っていた。だが家族に与える食事の支度および井戸からの水くみは私がやった。わが家から野田山林までは約800m離れているが、水田のあぜ道をたどりつつ、野田の木陰にたどりつき、飯炊きに行き、丁度飯炊きが終ろうとした頃だった。急に米軍のグラマン機がどこからともなく飛来して、低空飛行で機銃そう射を始めた。私は炊きつけの火を急いで消し、岩の陰でじっと敵機を見つ

めていた。マラリアで相当疲労していたから、たとえ敵の弾丸が自分に的中しようとい
ではないか。自分はいつ死んでもかまわないと思う程衰弱して疲労していた。岩のかげに
かくれてグラマン機を見ると、機上のアメリカ兵の服装や顔まではっきり見えていた。弾
丸は私に当たらなかった。グラマン機は私のおる林を通り抜け西方へ飛んで行った。それ
から私は飯を炊いた鍋を頭にのせて家族のいる場所を探して、みんなの腹を満たした事は
忘れ難い。当時、青年会場では空襲で住宅、家財道具一斎を失った人達でいっぱいだった。
飲料水を井戸から汲む仕事は若いわたくし達だった。井戸は私達の会場から 600 m程離れ
た所にある。水汲みに行く途中、水を入れるブリキ缶を枕に何回か休んで、みんなに飲み
水を与えた事か。グラマンの再度の機銃そう射と空襲で家を失い、着物、寝具、その他の
家財道具一切を失った私共にとって、日本軍の持って来た空いた米袋と家にあつた空き袋
が唯一の着物、寝具になっていた。16歳といえば、体も大分大人になりかけていた頃だっ
たと思う。しかし、その空袋を身にまとひ、夜はその中に身をかくして寝て、夜を明かす
毎日だった。何時の夜の事だったか、アダンの木と、すすきを茹って来て建てた掘立小屋
に空袋にはいつて寝ていると、「ああ疲れた、休んでから行こうよ」と言って、何か荷を
おろす音がかすかに聞こえた。しばらくすると、あのアダン林には今しがた運んだ何(体
か)の遺体もあるよ、と二人で話し合っていた。しかし、私はそれを覗き見る事さえ出来
なかった。おそらく、その時の彼等の荷物もマラリアで死んだ人の遺体ではなかったかと
思う。マラリアで死んだ者の遺体は前述のように筵に包まれ、伸びた足はそのままあらわ
にして、発熱しない者に運ばれて行った。今考えても戦争とマラリアの事は身震いする程
感じられ、忘れ去る事は出来ない。

③宮古におけるマラリアその発生と経過

沖縄県畜産会 久貝徳三

はじめに

終戦直後、宮古の社会が戦のどさくさで混乱していた頃、宮古本島全域に亘って、マラ
リアが猖獗をきわめ、毎日のように病死者を弔うという悲惨な年があった。連日の空襲に
よる弾丸の中をくぐりぬけ、生きながらえて来た人も戦争で食糧生産が出来ず、全員が栄
養不足で体力が弱っていたため、強烈なマラリア病に罹ってはひとたまりもなかったの
である。戦争中第 28 師団司令部の軍医少尉として宮古に駐屯し、終戦後八重山に帰られて
から、八重山のマラリア防遏に活躍なされ、その防遏にご尽力なされた大浜信賢氏はその
著書『マラリアの歴史』の中で次のように書いている。「ペストやコレラを地震に例えるな
らば、マラリアは大洪水に比すべきである。」事程左様に、このマラリアは住む人を総なめ
にしてしまうのである。ここでは、宮古島に発生したマラリアについて、その経過をたど
ってみたいと思う。勿論、今後再び、その発生があるとは考えられないが、過去の宮古歴
史の一頁として顧みるも無駄ではなからう。

マラリア発生の歴史

記録によると、紀元前 400 年以後、ギリシャの衰微及びローマ帝国滅亡の原因は、このマラリアであったとしている。即ちその頃からマラリアは地球上に存在していたのである。ところで宮古には 260 年前（1730 年頃）マラリアが流行していたというが、それはどこから侵入したのであろうか。

1737 年玻座真与人黒島首里大里大屋子等の調査では八重山全域にマラリア蔓延し、島の人々はこれを「八重山マキー」又は「風気」と称していた。当時、宮古・八重山の交流は盛んだったようで、宮古のマラリアは八重山から持ちこまれたとみるのが妥当ではなかろうか。

1898（明治 31）年、東京伝染病研究所の守屋倭造技師が八重山へ渡って調査した時、三種類の原虫を発見し、これがマラリア原虫であることを確認し、それ以来マラリアと呼称されるようになった。

今から凡そ 260 年前頃は、大親王の時代、宮古では人頭税を完納させるため、人口のふえた所から荒蕪地（こうぶち）の多い所への移民が推進された。その荒蕪地は長間方面で、当時この周辺はマラリアの多い地域であった。マラリアの発生地域は宮古島では土地の保水力がよく、生産性の高い地域であり、農業振興を如何に阻害した事か。マラリアの多い長間方面への当時の移民計画は失敗した。

昭和 19 年から 21 年にも多くのマラリア患者がいたと思うが、最も肝心な年にその詳しい統計がとられてない。

空襲に明けくれ、敗戦のドサクサでそれどころではなかったのか。瀬名波栄（1975）の『太平洋戦争記録 先島群島作戦（宮古篇）』*でみると、当時宮古の名だたる医師は第 28 師団司令部付の軍医少尉として召集されているので、民間の医療機関は殆どが閉鎖を余儀なくされていたのではなかったろうか。ところで宮古には 3 万近い日本軍守備隊がいたが、この軍隊のマラリア対策は如何なるものであったろうか。日本軍は直接戦闘には参加していない。しかし、相当数の兵隊が栄養失調とマラリアのために命を失ったはずである。宮古守備隊もマラリア防遏対策には苦慮した。台北帝大熱帯医学研究所の宮原、大森両教授を招いて、軍医部の教育を実施したのを始め、蚊の発生源を根絶する目的であらゆる手段を講じている。しかし効果はあまりなかったようである。（宮古に駐屯していた軍医は 180 名）

昭和 19 年 10 月から 20 年 6 月までは、殆どの人が防空壕生活を余儀なくされ、食糧生産は行なわれていなかった。

しかし、宮古守備隊のために、食糧の徴発がたびたび行なわれたのである。数ヵ月後に食糧難が来ることは十分予測出来た。しかしグラマン戦闘機の機銃掃射の下で、芋植えをすることは出来ない。食糧難は終戦と共にやってきた。食べたくても食う物がなく栄養失調の人が多かった。そこへ悪性の熱帯性マラリアの大流行である。これまでのマラリアは水溜りの多い地方に限られていたが、今度は宮古島全体に蔓延した。やせ劣えた体は強力な

熱帯性マラリア原虫の前には抗する術も無く、多くの人びとが、戦争の犠牲からは何とか免かれ終戦を迎えて安堵したのもつかの間、次々と命を失っていったのである。終戦となると、宮古守備隊も武装を解除された。その武器の中には多くの発煙筒があったが、日本軍はマラリア原虫の媒介する蚊を駆除撲滅するという目的で、各地でこれを燃やした。発煙筒から吹き出される白煙は、やぶの中にも侵入し、藪蚊を追い出す効果はあっただろう。しかしハマダラ蚊まで駆除することは出来なかったようである。

昭和22年のマラリア患者が46,000余名もいたというが、その時の宮古の人口についてはっきりした記録を探すことは出来ないが、凡そ65,000人程度であったろうと推定されるので、70%前後の住民がマラリアに罹っていた事になる。これこそ大洪水に見舞われたも同然と言わざるを得ない。

悲惨な袖山の人びと

マラリアによる廃村、それは何も18世紀だけにみられたのではない。昭和21年にもあった。その部落とは袖山部落である。現在の宮古空港の真北500米の所、袖山浄水場を西の端として、戸数41戸の集落が昭和18年に出現した。この集落は海軍飛行場(現在の宮古空港)を設営する為、強制立ち退きを命ぜられた八原部落の人びとだった。ところがやっと居住地らしく整備された1年後、その半数以上は飛行場爆撃の流れ弾によって焼失してしまい、部落の人びとは山の中の自然壕での生活を余儀なくされた。やがて終戦となり、人びとはやっと太陽の下で暮らせる喜びを体で現わし、焼け跡を片づけ、住居の再建を隣近所助け合いながら行なった。まともな資材なんてあるわけがなく、釘一本にも事欠く時代に建てた家がまともであるはずがない。弱った体で、ないないづくしの中で、周辺の山から丸太を切り出し、ススキを刈り取って来て何とか雨露をしのぐ掘建小屋を造り、そこに住んでいた。しかし、この袖山という所は、16世紀与那国鬼虎の娘が、ここで怨恨を抱きながら死に絶えて以来、その崇りのある所として、つとに名高く、人々をして袖山の八重山墓の前で八重山の唄を歌うと、鬼虎の娘の霊に恨まれると昔から伝えられた所である。その崇りが今になって表れるのでもあるまいが、熱帯熱マラリアとデング熱がこの部落を襲いかかってきた。

この模様は当時の新聞が詳細に伝えているので、ここで再録したい。

「宮古タイムス」掲載記事より*

(1) 袖山部落 死の恐怖 (昭和21年10月2日 「宮古タイムス」掲載)

「袖山部落に死の恐怖 …マラリアとデング熱の悪疫猖獗のため、全戸41戸は病魔に呻吟し、毎日死者が出る有様で、現在までに、既に30人余りの死亡者を出し、夫婦共死、子供連続死亡等、目もあてられず、殊に貧窮家庭は葬儀も出せぬという有様で、今や部落民は恐怖に陥入り、部落を捨てて、富名腰や腰原方面へ逃亡している。なお死亡する人と患者の続出で、他部落の親類も見舞いに行かないという迷信的な恐れも出ているので、いよ

いよ悪疫と迷信に同部落は荒廃にさらされている。」

このような悲惨な状態を見て、宮古の人びとはこれを放っておいた訳ではなかった。自分の生活も喰うや喰わずの貧しい生活ではあるが、「世の中には最も苦しんでいる人びとがいる。この人達を救え」とばかり立ちあがったのである。

(2) 袖山救済に全力集中（昭和 21 年 10 月 16 日 「宮古タイムス」 掲載）

「死の惨状に喘ぐ袖山部落の同胞を救えという救済義援金募金運動に鏡原学区では心からなる同情を捧げ、この程学区有志会の決議により、町の一元以上の抛出の他に、更に各戸から一元以上を抛出することを申し合わせた」

この救済義援の話は、宮古全域に広がり、部落単位で多額の義援金が寄せられた。しかし、いくら義援金が寄せられても、死んだわが子が、そして死んだ親が生き帰ってくるわけではない。袖山の人びとの恐怖感は胸の奥深く染み込み、多くの義援金を寄せてくれた人びとに感謝しつつも、何時の日か、この恐怖からのがれることを願い、ここから再び引越す事を考えていたのである。

村立てをしてから僅か 3 年目である。経済的にゆとりがあるはずがない。しかし死の恐怖には勝てなかった。今日一戸、明日一戸と袖山の人びとは人目をはばかるように静かに引越していった。

(3) 昭和 21 年 11 月 6 日時の「宮古タイムス」は、袖山の調査結果として、次のように報告した。

総戸数 41 戸、罹病家 39 戸、人口 360 人、罹患者 350 人 (97%)

引越し先：富名腰 31 戸、腰原 4 戸、七原 5 戸、袖山に残っている家 1 戸

死亡 38 人、一家全滅 1 戸 (5 人)、夫婦死亡 7 組、孤児となった者 2 人、

夫婦家族別居 1 戸、引越資金がないため家屋を売却した者 14 戸、

一戸当一反 (300 円) の町有地の払い下げがなされたが、これが買えずに町に返却された土地 3.9 町歩、家畜全滅

当時の袖山部落の惨状は、これらの数字から読みとることが出来よう。葬儀も出せない位困っていたのは家族全員が病気で伏せていたからであり、遺族の能力をとやかく言うべきではない。まともな板材もないため、寝ていた筈で包み、馬車に乗せて野辺送りする風景は考えただけでもぞっとする。更に父親の葬儀を済ませて帰って来たら一人家に残されていた母親が冷たくなっていたという話。家族全員が病気で身動き出来ず満足に食事をつくる事も出来ないため、次第にやせ衰えていく。これを地獄と言わずして何と言おうか。袖山の人びとが誰言うとなく、与那国の鬼虎の娘の祟りを考え、一日も早く死の恐怖からのがれるために、再度の引越しを考えたとしても、むべなるかなである。

マラリア防遏

袖山部落の人びとのように、死の恐怖を二度と再び宮古の人びとにさせるな…。という叫びは宮古に住む全ての人びとの願いであった。しかし、それは唯言うだけでは効果は期待出来ない。何らかの形で実行に移さねばならない事は誰もが知っている。昭和22年7月14日の「宮古タイムス」には次のような記事が見える。

マラリア掃滅へ

「宮古民政府衛生課では、袖山部落の悲劇を再び繰り返さぬようマラリアの徹底的掃滅を行なうことになったが、軍政府でもこれについては力強い援助を与え、スチムソン軍医大尉は自ら先頭に立って来間島、集団農場（現在の佐和地、高野部落一帯）付近、山川、ペンフ（現在の福山部落）、白川田等を踏破し、蚊族の精密なる分布状況調査を行なっており、大きい計画の下にこれを行なう事になった。尚ディーゼル油（廃油）ドラム缶75本を軍政府よりマラリア蚊撲滅用として払い下げた。

マラリア専属医師に新垣長順氏

マラリア専属医師に沖縄民政府医官 台湾医学博士 新垣長順氏が衛生課に赴任して来た。昭和21年7月26日には宮古民政府で「マラリア撲滅三原則」なるものを発表し、島民の協力、自覚を促している。それは、

1. 原虫対策→薬品服用により患者、特に原虫保有者の体内原虫を撲滅する。
2. 蚊族対策→アノフェレス（ハマダラ蚊属の学名）蚊、特に幼虫（ポーフラ）の掃滅をする。
3. 刺創予防→蚊帳を利用し、蚊にさされぬようにする。

更に軍政府はこれらの項目を具体化するため、多量の DDT 粉剤（10% 殺虫剤及び 100% DDT）を有病部落に交付し、散布器も準備されたので有病地帯全域に亘り、蚊及び幼虫の撲滅作業が実施された。

8月末にはアデブリン300万粒と、若干の DDT が入荷、マラリア掃滅作戦は9月早々から各部落単位で実施されることになった。

2) 防遏作業による記録

①宮古島のマラリア防遏と伊是名信貴先生

旧マラリア防遏技手 下里泰徳

宮古島に於けるマラリアは、昭和2年8月に宮古支庁内に宮古マラリア防遏所が設置され、当年の状況は患者1,510名（以前からの患者数を含む。昭和2年は943名）、死者93名を以て始まる。それ以来数多くの患者と死者を年と共に出し、昭和18年には患者1,435名死者98名を出し、昭和19年には第2次世界大戦による戦火も激しさを増した*。戦時中数多くの軍人や軍属、住民達がマラリアの犠牲になったが、その詳しい記録は残されていない。島

の有病地区だった所では、かつて部落のあった廃墟の跡が、ところどころに見受けられる。

昭和22年には、マラリア患者46,231名、死者428名という惨状を呈している。有病地区は、平良、城辺の北部海岸地帯及び下地の全域に広がり、その殆どが水源豊かな地域で、総計15,875エーカーの水系面積を有し、アノフェレス蚊の幼虫が多く発生していた。当時、伊是名信貴先生はマラリア防遏課長として、その予防撲滅策を企画実施しておられたが、当時の各有病地区の住民達は殆どが衣食住に事欠くと同時に、家族殆どがマラリアで病床に伏し、又、体力的に衰弱化していた。かような部落民を対象にマラリア防遏業務を遂行するためには、それ相当の忍耐と努力を必要とした。晴天の日には作業督励、雨天の日には衛生教育と検血、鏡検、投薬と全く余暇のない毎日だった。

或日は徒歩で、或日は自転車で雑草の茂る山道をかきわけて、一里あるいは四里にまたがる有病地区を巡り、病床に臥した患者を慰め、あるいは又地区の役員達を励まして防遏作業を実施せしめ、アノフェレス蚊の幼虫、及び患者調査、投薬、薬剤散布の指導、タップミノ一魚の放殖等、課長自ら先頭に立ってマラリアで衰弱した住民達と共にマラリア防遏業務に邁進された。最初は疲労と衰弱を原因に作業をこぼんだ人々が多かったが、(伊是名)先生の住民に対する愛情と熱意に感動した村人達は挙って防遏作業や検血に協力してくれた。

「みんなの力でみんなの健康を」のスローガンを掲げて有病地区住民達が先生の指導督励の下に防遏作業が行われた結果によって、遂に昭和35年にはマラリア患者皆無の大成果を果し得たのである。憶えば昭和3年5月3日宮古マラリア防遏所勤務を命ぜられ、爾来宮古マラリア防遏所の検疫官、防疫官吏、課長、所長の重責を果たしつつ、30有余年の長い年月、宮古マラリアの撲滅される日まで、一意専心、一筋にその道に精進してこられた先生の在職中のご苦勞は筆舌につくし難し。私は昭和24年から昭和35年まで先生と共に宮古のマラリア防遏業務を担当してきたが、先生が常日頃ご指導なされたご教訓は、今なお脳裡から去り難し。お蔭で昭和56年まで公衆衛生業務を大過なく勤める事が出来、先生にいつも感謝しているのである。今、その昔、マラリア有病地帯だった各地域を訪れる時、同地域の住民達が素晴らしく健康に恵まれ、経済的、文化的、スポーツ、その他あらゆる面で裕福に一大飛躍発展しているとの様相を見聞する時、夢見る心地で胸いっぱいです。当時のマラリア有病地区の先輩の人達は、今でも「伊是名信貴先生は私達の命の親でした。」と昔の伊是名先生の思い出話をなつかしそうに話していた。先生は79才になられた時に、公衆衛生功勞者として勲六等瑞宝章を授けられた(写真1)。



写真1

〈伊是名信貴氏の勲六等瑞宝章叙勲を伝える新聞記事〉

②マラリア防遏の思い出(1) *

伊是名信貴

宮古のマラリア防遏所は昭和2年8月に開設されまして、私は翌3年に同所勤務マラリア専務巡査として就任しました。私の任務はマラリアを媒介する蚊をなくする事でありますので、第一に、蚊の幼虫であるポーフラの発生する排水溝や水田、池、沼等は適当に措置せねばなりません。それで成虫蚊をなくするための作業としては、平素は多忙の部落民ですので、春秋二回の大掃除に、特にマラリア防遏作業として屋敷周辺の雑木の伐採をして貰い、又青年団は拝所お嶽等の雑木、雑草の伐採を共同作業でして貰い、採光、通風を良くしてマラリア蚊の棲息を絶つことに努めた。又ポーフラの発生している排水溝は除草浚渫して流水を早くして蚊の予防に努める等、これ等の作業は適当な時期を見計らい、部落民や青年団員の共同作業として遂行してもらいました。このようにして出来る限りの作業をしてきても、雨年(降雨量の多い年)には、自然にマラリア患者が多く発生するのがありますが、旱魃年(雨量の少ない年)には自然に患者が減少すると云う事をして繰り返していたのであります。

以上申し上げましたように、マラリアの消長は専ら自然の気象に左右されるもので、人為的な微力ではマラリアの撲滅は望めないと思いました。然しマラリア防遏に専念従事する者として、やるべき事はやらねばならず、やればやっただけの効果はあった訳ですから、マラリアの発生を一人でも少なくしようと、日本軍医部に移行するまでの長い間努力して参りました。今考えますと、日本がもし敗戦にならなかったとしたら、我が宮古・八重山の人々は、今時分、昔のようにマラリアに苦しめられ、苦難の道を歩んでいたのではないのでしょうか。と思うのは、私一人ではないと思えます。

我々は戦争のために多くの物を失ったのでありますが、眼に見えないマラリアという病魔の排除と撲滅の出来た事は、何よりも大いなる収穫であります。特に、昭和3年以来終戦直後までの長い間、マラリアの撲滅は人為的には望めない、むしろ不可能だと思っていた私にとっては、この大事業の完成は驚喜という外ありません。この不可能を可能にいただいた、マラリア防遏関係業務に従事された職員各位の並々ならぬ誠意と労苦は勿論のこと、この事業に注ぎこまれた大量の必要物資を提供補給してくれたアメリカに対し感謝せねばならないと思えます。

昭和16、17年の夏でしたでしょうか、時期は定かではありませんが、割目(現在の吉野部落)の検病検査の時です。或る家の座敷に青白い色の体の衰弱した年の頃24才から25才位の女性が横臥していたのです。そこで家族を呼び病状を聞くと、10日程前から発熱しているが、4、5日前からは食事を何も食べませんという。それで私はその家族に盃に少し水を入れてきて下さいと言って、持って来た盃の少量の水にアデブリンを一錠溶かして、患者に向かって「この薬はマラリアの最高の薬だから、これだけ飲めばあなたは助かるから必ず飲みなさい」と言いながら口中に入れましたら、わけなく飲んだので、家族も今までどの薬を与えても飲まなかったのに不思議だなあと話し合っていました。

地方の風習として病人の飲み残した薬は捨てるのですから、この病人が若し死んだら残った薬は捨てるはずだから、余分に与えるわけにはいかないと「この薬は明日の分は福里の駐在員山城様に預けて私は帰るから」と言って3～4日分位を預けて帰りました。後日聞きましたら、この薬で元気を快復してお嫁に行ったと聞いて、アデブリンさえあればマラリアで人命を失うことはないとの自信を深めました。

時期は定かではないが、沖縄を航海する汽船はなく、宮古商会のポンポン船、宮古丸だけが沖縄を航海していたのですから、同船で沖縄へ行った（時の*）ことです。防遏所ではマラリアの薬がすっかりなくなっていたので、沖縄本島の薬品会社へ注文したが、何度催促しても送ってもらえません。話しによると沖縄ではキニーネはたくさんあるとの事でしたので、早速宮古丸で沖縄へ渡り、キニーネをあっちこっちの店から買い集めて、これで宮古のマラリア患者は救えるんだと喜んで帰った事は忘れられません。

③マラリア防遏の思い出（2）*

旧マラリア防遏所書記 豊原秀夫（写真2）

1957年10月のことであった。下里泰徳氏より「マラリア防遏の書記をやってくださらないか」と話しがあった。従来の水溜りに棲息するマラリアを伝染させるアノフェレス蚊の幼虫撲滅作業から、地域住民の直接日常生活につながる家庭における家屋内のアノフェレス蚊（成虫）の撲滅作業への改善計画に基づく業務を始めるので、その事業の整理事務を行う業務である事等も説明していただいた。当時、サラ台風による被害直後で、私の住宅も全壊して仮小屋を建てて住んでいた頃だったが、宮古のマラリアを撲滅し地域住民のために役に立つ仕事だと考えたので、ただちに承諾し、氏のご厚意に感謝してマラリア防遏所書記として勤めさせていただきました。その後、伊是名信貴先生のご指導の下、宮古本島内のマラリア防遏所薬剤散布作業の計画作成、作業員の給与の請求、薬剤の管理、噴霧器、煙霧器等の管理統計の作成、関係官庁への月報提出等の業務を行なった。



写真2
（豊原秀夫氏）

マラリア防遏作業の目的を遂行するには、やはり常日頃から常時薬剤の確保及び散布器具類の確保を重点に整備点検し、いささかも作業に支障をきたさないように心得るべきだと、その職責の重大さを痛感しました。

当時マラリア患者が多く、投薬治療と併行して、アノフェレス蚊を撲滅するための各屋敷内に存在する建物一斉に薬剤を散布したのである。

伊是名先生は人格高潔で、先生の心豊かなお人柄は、当時のマラリア防遏地域の住民達に信頼されていた。先生の行なった一般住民に対するマラリア防遏関係の衛生教育は、今なお高く評価されている。一方、下里氏も伊是名先生に劣らぬ人格者で環境衛生、殊にマ

マラリア防遏に関する衛生教育を行ない、それをとおして地域住民と人間関係を良くし、一般住民から信頼されていた。毎日の薬剤散布は両氏の現場監督によって能率的、且効果的に実施されたのである。

一方、散布員の皆さんも真面目正直な方達ばかりで、指導者の計画どおり作業を進行させた。そのため当時のマラリア防遏作業は円滑に進められ、その成果を最大限に挙げ得たのである。当時の作業員は7名でしたが、その中の4名は私の同窓生で、常日頃彼等と苦楽を共にしたものの、今だに想い出は筆舌につくし難い。「私達で宮古島のマラリアを撲滅するのだ」と、彼等は毎日のように口ずさんでいた。当時のマラリア防遏所関係職員全員の誠意と忍耐力が、マラリア有病地区32部落の大衆をマラリア病から救い上げ、今日のような健康で豊かな部落に仕上げたのである。

宮古群島からマラリアを完全に撲滅できた原因について、私は次の4項目をあげてみたいと思う。

1. マラリア防遏責任者と作業員の人事が最適任者で構成され、そしてその性格が相共通して、強く、正しく与えられた業務を誠実に実行し、最初から最後まで人事の異動がなく防遏作業が実施された。
2. 薬剤及び器具を常時完備点検して、マラリア防遏業務を円滑に進めたこと。
3. 宮古、八重山に於けるマラリア防遏作業が同時期に同型で一斉に実施されたこと。
4. 当時アメリカ政府の沖縄に対する政策が賢明で、沖縄諸島からマラリアを撲滅させるための同政府からの莫大な費用援助がなされたこと。

第2次世界大戦前後を通じて宮古島に侵入し多くの犠牲者を出し、宮古全島を苦しめたマラリアは完全に撲滅され、今日のような素晴らしく健康に満ちた豊かな宮古島に発展したことは全く夢見る心地である。二度とこの島にマラリアのような悪病が発生しないよう念ずるのである。

④マラリア防遏の想い出(3)*

下里泰徳

昭和20年8月15日、烈しかった残酷な第2次世界大戦は終結し、我が沖縄は祖国日本国から孤児のように切り離されて、アメリカ国の統治下に委されてしまった。人々は悪夢から醒めたようだった。けれども、戦災で住む家なく、着物、寝具、食料等に欠乏し、金銭も日本軍の強制貯金で一文なしの人達が殆どだった。郡民の栄養失調、不潔な環境下につけこんで、当時宮古島では「マラリア」が猛威をふるって蔓延していた。殊にこの病気は、平良市の水源豊かな北部海岸地帯及びその周辺部落一帯、下地町全域、城辺町の北部海岸地帯及びその周辺部落一帯に蔓延していた。

何れも水源豊かな湧水地帯である。住民達の顔は老若男女を問わず、白や黄色に染まり、働く能力を失った人達が殆どだった。農地の殆どは原野と化し、部落内の道路には雑草が繁茂し、梅雨時にはズボンの半分をぬらす程荒れ果てていた。

昭和22年宮古民政府（現在の宮古支庁）では、住民の救済事業として、平良市の大野山林（現在の高野部落周辺地帯）60町歩を伐採、開墾して甘藷を植える計画で集団農場を設立し、職を失った人達を雇用して、伐採、開墾、甘藷の植付等の作業に従事させ、男15円、女4円～10円の日当で、労務賃金を支給していた。労務者は、下は15才から35才までの人達だったが、20才前後の男女が多かった。

平良、城辺からの労務者で総数500名だったと記憶している。当時の物価は米1升で100円、甘藷10斤で100円だったが、私達の給料は300円から350円だった。かような状態だったから、住民生活は日に日に困窮し、激しい労働と栄養失調生活環境の不備等で、マラリア熱発患者が続々発生していたのである。その当時私も集団農場で農業技手として勤務していた。鍬や鎌や鋤を握って働く労務者を監督するのは、恰も実践そのものであった。なぜなら、働いている労務者の中のどなたかが、何時発熱するかも分からないという事だったからである。又熱発患者が出ても彼等に与える薬品はなく、ただその人達の運命にまかす以外に方法はなかったからである。私も当時のマラリア患者の一人で、仕事中心何回も発熱して、同僚職員や労務者の皆さんに大変お世話になった。熱発患者を慰め、又弱体化ながらも仕事に夢中になっている労務者達をいたわりながらの集団農場での思い出は、今もなお脳裡に浮んでくる。

昭和22年9月15日、私はマラリアに冒された弱体で農場長の励ましの言葉にも答えず集団農場の職を辞した。理由は、もっと何らかの仕事を見つけて収入を増やし、マラリアで伏している8名の家族を救いたい信念をもっていたからである。辞職後、場長にお願いして、馬耕の請負、集団農場の作業によって生じた雑木の根等を集めて木炭を製造販売、その他いろいろの仕事を見つけて一身を省みず、一生懸命励んだ。その甲斐あって、家庭経済は漸次上昇しつつあった。だが、家族みんなの健康状態は思わしくなかった。丁度程なく、アメリカ民政府の援助でアデブリン錠剤が配布されるようになり、それによって家族も漸次回復していった。お蔭で家族全員が死を免れたのである。

昭和24年4月、伊是名信貴氏が私の家を訪ねて来られ、「実はいま、君も知っているとおり、宮古の各地でマラリアが大流行しているが、君、僕と一緒にマラリア防遏業務をやってみたらどうか、君がそれに承諾してくれば、僕も相当助かると思うが如何」と話された。先生からの依頼で内心先生とならどんな仕事でも…と嬉しかったけれども、しかしマラリア防遏の業務に全く無知だった自分にとって、どうぞ返事申し上げてよいやら、しばし迷った。けれども、過去に於けるマラリア病との苦斗、甦った喜びが、心の底から私を励ましてくれているかのように感じられた。現在マラリアで苦しんでいる宮古の同胞を、1人でも多く私の微力で救う事が出来るなら、どんなに幸せな事だろうか。種々の事柄が私の脳裏を走り続けていた。「私のような無知の者でよかったら、お引き受け致しましょう。先生のご指導ご協力を仰げば、何とか出来ないと思う事も出来ないことはないと思いますから、どうか宜しく願います。」と申し上げたら、伊是名氏は「有難う、それでは宜しく頼むぞ」と話されて帰られた。

昭和 24 年 4 月 30 日付で、私は平良地区マラリア防遏出張所勤務を宮古民政府知事 具志堅宗精氏より命ぜられた。辞令を受けて、私は宮古のマラリア撲滅する日まで頑張るのだと、ひそかに自分の心に誓った。私の仕事は水系及びアノフェレス幼虫の発生調査、水田水溜り等に対する薬剤散布、排水溝の清掃、浚渫作業等督励実施、患者に対するアデブリン服用の指導督励、及び衛生教育、タップミノアの移植、採血、鏡検等であった。薬剤散布は作業班長と連繫を密にして、ポーフラ調査の結果必要と思われる場所に実施し、排水溝の清掃、浚渫作業等は各有病部落の会長、役員青年団等を督励して 15 才から 50 才までの部落民によって、無報酬で実施された。しかし、当時マラリアによって弱体化した住民を無償でこのように作業に従事させるのには、それ相当の苦心をした。その目的を果たすために、住民の納得のいくような衛生教育を必要とする。部落民の適当な時期と時間を考え、種々の方法で衛生教育を実施した。このように、適切な目標に達するまでのマラリア防遏作業がとどこおりなく実施出来たのである。

時折急を要するような事態が生じた際には、10%DDT 粉剤 (25 封度 (ポンド) 入) を自ら 2 缶棒で擔いで 3km の地域まで行って散布し、午後 7 時帰宅した事等何回あったか分らない。

昭和 25 年夏の或る日の事、宮古島では郡のバレー (ボール) 大会が平良市の野球場 (旧沖縄県立宮古女学校跡) で華やかに展開されていた。その日、私は作業員 5 名と共に集団農場東部の排水溝の清掃作業に従事していた。ところが、午後になって急に天候が微妙に悪くなって来た。伊是名氏も当時私共の作業督励で、作業現場におられた。私は伊是名氏と話し合って作業を中止して帰宅するように作業員に指示した。みんなは帰宅の途についた。途中天候は猛烈な暴風雨となった。私は道端の茅や雑草にしがみつきながら、命からがら吾が家へたどり着いた。帰宅後、伊是名氏や作業員の皆さんの事が気がかりだったが彼等もやっつと帰宅したとの事だった。翌日全員無事で顔合せしたのでホッとした。

アデブリンや 10% DDT 粉剤は、私にとって貴重品だった。アデブリンの一粒、DDT 粉剤の一粉が宮古島のマラリアを撲滅するための大切な品だと思っていたからである。住宅はカヤ草で小さかったが、天候悪化の際には薬品や薬剤の保管に余程神経をついやした。

昭和 27 年 3 月 31 日、宮古群島政府は解消され、同年 4 月 1 日琉球政府創立、宮古群島政府は宮古支庁と改称、琉球政府に統合された。それで私達マラリア防遏所職員は全員自然退職した。

昭和 28 年宮古保健所創立、宮古群島政府におけるマラリア防遏所の業務は総て保健所へ移管された。同年 9 月、私は再びマラリア防遏業務についた。当時伊是名氏は衛生課長の配下にあり、マラリア防遏課長の座を下りて居られたが、私達マラリア防遏関係職員は伊是名氏のご指導の下でマラリア防遏業務を進めた。時折、伊是名氏のマラリア防遏計画が衛生課長から却下され、思わぬ事態となった事等もあったが、私達マラリア防遏職員は伊是名氏の指示どおり実践した。

昭和 22 年には 46,231 名の患者が発生、そして昭和 27 年には患者数 123 名と減少して

ただけに、私達防遏職員は連繫を密にし、力を合わせて「宮古マラリア撲滅」を目標に励んだ。人通りのまばらな山々の小道をかき分け、或は水深1mを越す流れの中を25封度（ポンド）入れのDDT粉剤を擔いで渡り、又はパンツ一本で水深1m以上の排水溝や沼に下りて清掃作業を実施し、水田のあぜ道を踏んでの薬剤散布の際、誤って水田にころがり込んで泥まみれになるなど幾度かあった。又自転車仕事帰りにパンクして3里の道程を、自転車を引っ張って帰所した時もあった。

今になって考えると、野原の中で咽喉をならしながら昼食をとった日々等、数々の思い出が時季最近のように感じられる。

昭和32年、米国援助により多量の薬品が送付され、ウイラー氏のプランによって家屋内外の薬剤散布が隅々まで実施された。作業は昭和35年まで続行された（その二、表8）。昭和35年、宮古島のマラリアは遂に撲滅された。有病地区の住民達は勿論のこと、私達関係職員は夢見る心地で、心から例えようのない喜びに満ちた。

マラリア有病地区の中で古くからマラリアに苦しめられてきた、平良市字東仲宗根添の山北部落（現在の宮原部落）では、将来へ向けての部落発展の想像画を掲げて部落民総出で健康祭を盛大に挙行し、健康に甦った喜びを心いくまで踊り歌い祝った。32区の有病地区だった部落、現在では農業にスポーツにあらゆる面で部落、或いは郡内の各地で、或いは県外で一大飛躍発展し、子孫繁昌、裕福な楽しい人生の日々を過ごしている。宮古マラリア防遏に30有余年の永い年月の間、献身的努力をされた伊是名信貴氏は昭和35年7月30日、「私は何も思い残すことはない。30有余年に亘って皆さんと辛苦を共にし、宮古のマラリアを撲滅することが出来て大変嬉しい。これも偏に皆さんが力を合わせて努力した賜だった。有難う。」と言われて八重山石垣市へ帰郷された。

マラリア防遏業務の中での苦しかった事、楽しかった事、数多くの思い出を残して、私の12年間のマラリア防遏の仕事は終わった。殊に苦難にあえいだ数多くの思い出は、筆舌に尽くし難い。

3) マラリア防遏作業貢献者

マラリア防遏功労者

具志堅宗精（警察所長） 宮国泰誠（衛生部長、初代宮古保健所長） 柴田朝雄（防疫医）
伊是名信貴（防疫監吏、防遏所長） 山城正之（防疫監吏） 首藤新春（防疫監吏）
狩侯巖（主任事務官） 下地恵信（雇） 下地ハル（小使）

マラリア防遏作業従事者

平良市

下地恵俊：1952年11月1日～1964年6月 宮古保健所長、長期に亘り本郡マラリア防遏の最高責任者として尽力なされた。

砂川朝一：1951年1月～52年3月 平良地区マラリア防遏出張所長兼事務官

平良武則：1948年5月までマラリア防遏業務を担当。1960年6月までの長期に亘り本郡マラリア防遏業務に従事す。

平良孔春：1954年4月～1961年10月 マラリア防遏作業に従事す。

立津良栄：1957年3月～1961年10月 マラリア防遏作業に従事す。

富永玄禮：1954年4月1日～1961年10月 マラリア防遏作業に従事す。

古波蔵光吉：1957年10月～1960年10月 マラリア防遏作業に従事す。

佐渡山清一：1947年1月～1952年3月 マラリア防遏業務に従事す。

伊山宗五郎 池間恵恒 池間芳雄 平良武昌 久高德市 宮里健一 平良恵教

下地恵教 知念勇 豊原秀夫 平良盛金 宮国泰誠

城辺町

上地準作：1956年7月～1958年4月

新城義男：1958年7月～1981年3月

比嘉純一 仲間好和 黒島盛市 砂川昌教 奥平方勇 本村寛一 西原英一

松堂恵俊 松堂俊雄 小川勲 島田文雄 川満一雄 上原富美男

下地町

友利恵花 洲鎌泰雄 羽地利徳 松村眞一 友利恵棒 砂川三郎 兼本盛任

下地昌伝 下地原行 池村太郎 東風平玄誠 下地玄興 砂川三郎

参考文献

飯島 渉 2023.『マラリアと帝国 [増補新装版] -植民地医学と東アジアの広域秩序-』東京大学出版会.

家田貴子 1995. DDTは人類に何を与えたか.『講座 [文明と環境] 7 人口・疾病・災害』朝倉書店, 197 - 209.

稲福盛輝 1979.『沖縄の医学』第一書房.

稲福盛輝 1995.『沖縄疾病史』三一書房.

稲村賢敷 1972.『宮古島庶民史』三一書房.

稲村賢敷 1977.『宮古島旧記並史歌集解』琉球文教図書出版.

大鶴正満 1998. 沖縄のマラリアー日本本土, 近接する台湾と関連してー. 琉球大学附属地域医療センター編『沖縄の歴史と医療史』.

沖縄県衛生監視員協会 1986.『二十五周年記念 衛生監視業務のあゆみ』記念誌発行編集委員会.

沖縄県宮古島医療史編纂委員会 2012.『沖縄県宮古島医療史』(社)宮古地区医師会.

小禄恵良 2000.『広報 みやはら (第一巻)』宮原自治会.

- 小禄恵良 2006. 『広報 みやはら (第三巻)』 宮原公民館建設期成会・宮原自治会
- 岸本高男・比嘉ヨシ子・村田健司 1985. 宮古島におけるコガタハマダラカの調査. 衛生環境研究所所報 19, 50-54.
- 崎浜 靖 2003. 地籍資料を利用した歴史空間の復原作業 (2) -マラリア有病地の地理的性格-. 南島文化, 25, 47-72.
- 崎浜 靖 2010. マラリア有病地の地理的性格-宮古島・東仲宗根添を事例として-. 大塚昌利編『地域の諸相-地域が人を育て 人が地域を創る-』古今書院.
- 崎浜 靖・鈴木厚志 2021. 資料 下里泰徳編「宮古マラリア追憶記」(その一). 南島文化, 44, 95-108.
- 崎浜 靖・鈴木厚志 2022. 資料 下里泰徳編「宮古マラリア追憶記」(その二). 南島文化, 45, 121-138.
- 崎原盛造・平良一彦 1996. 沖縄におけるマラリア・フィラリア対策史. 琉球大学医学部附属地域医療センター編『沖縄の疾病とその特性』九州大学出版会.
- 鈴木厚志 2015. 宮古島におけるマラリア有病地の地理的環境とかんがい排水事業の空間表現. 2015 年度日本地球惑星連合大会におけるポスター発表.
- 鈴木厚志 2017. 近代期宮古島におけるマラリアと防遏対策-防遏所勤務者の記録による-(その2). 第11回多良間島研究会(沖縄県立芸術大学)における口頭発表.
- 瀬名波栄 1975. 『太平洋戦争記録 先島群島作戦(宮古篇)』先島戦記刊行会.
- 田中 寛・熊田信夫・福嶺紀仁・川満彦一・伊是名貴信・城間祥行 1959. 過去3年における琉球宮古島のマラリアの変遷-その疫学と防遏. お茶の水医学雑誌, 7, 777-785.
- 仲松弥秀 1942. 琉球列島に於けるマラリア病の地理学的研究. 地理学評論. 18, 49-73.
- 仲松弥秀 1964. 宮古諸島の地理. 琉球大学沖縄文化研究所編『宮古諸島学術研究報告 民俗・地理編』26-32.
- 平良市 1978. 『平良市史 第4巻 資料編2 近代資料編』平良市役所, 282-283.
- 平良市 1979. 『平良市史 第1巻 通史編1 (先史~近代)』平良市役所, 472-473.
- 的場益二 1937. 沖縄縣宮古郡平良町佐和地開墾事業. 農業土木研究, 3, 57-63.
- Miyagi, I., Toma, T., Malenganisho, W. LM, and Uza, M. 1996. Historical Review of Mosquito Control as a Component of Malaria Eradication Program in the Ryukyu Archipelago. Malaria History in Ryukyu Archipelago, *Southeast Asian Jour. Trop. Med. Public Health*. Vol. 27, No.3, 498-511.
- Toma, T., Miyagi, I., Takagi, M. and Tsuda, Y. 1996. Survey of Anopheles Minimus immatures in Miyako Island, Ryukyu Archipelago, Japan, 1991 and 1995. *Med. Entomol. Zool* 47, 167-170.

Research Material, Edited by SHIMOSATO Taitoku: "Records and Reminiscence of Malaria
Diseases in Miyako Island" : Part 3

SAKIHAMA Yasushi, Okinawa International University
SUZUKI Atsushi, Rissho University

This research material is a record of preventing measures and their activities in the diseased areas of falciparum malaria that existed in Miyako Island, Okinawa Prefecture from the late 1920s to the 1960s. The record was written and edited by Mr. IZENA Nobutaka and Mr. SHIMOSATO Taitoku, who worked at the Miyako Malaria Suppression Center (currently Miyako Health Center). The authors obtained this material through Mr. OROKU Keiryō who was a friend of Mr. SHIMOSATO Taitoku, are going to publish it as a research material of this journal. This research material will be divided into three parts. In part 3, we present the response to the rapid increase in malaria cases from the end of the Asia-Pacific War to the end of the war, and the hardships faced during the period of the Miyako civil government and the Miyako archipelago government to the implementation of the Wheeler Plan to achieve malaria, based on the records kept by people living in the area and workers who prevented the outbreak.

